

## おわりに

本書では、名古屋大学の包括学校の一つである第八高等学校について述べてきました。

二〇〇三（平成一五）年に『旧制高校物語』を刊行した秦郁彦氏は、旧制高等学校が近年の日本においてなお強烈な存在感をみせていると指摘し、その理由を次のように述べています。すなわち第一に、戦前の六・五・三・三制の学校体系が戦後の六・三・三・四制に改革される過程において、旧制高校だけが完全に消滅してしまったことへの哀惜の思いがあること。第二に、旧制高校は帝国大学の予科的性格をもち、語学を中心とする一般教養に重点をおいたカリキュラムをゆとりたつぷりに消化できたこと。第三に、すぐれた教師陣によるマンツーマンに近い教育を実施するとともに、生徒の大半が学寮生活の中で切磋琢磨しつつ友情を育てる環境があったこと。そして何よりも旧制高校が同年代男子青少年の1%にも満たないエリートを養成する機関であったことを指摘しています。本書が描いた第八高等学校がこの指摘に即したものであったかどうかについては、読者の判断に委ねたいと思います。

本書では、ごく限られた紙数で第八高等学校を描くことが求められました。八高を含む旧制

高等学校が廃止されてから六〇年近い歳月が流れようとしています。こうした時期に刊行される本書が取り上げるべき事項は実に多岐にわたるものだと思いますが、本書の性格上取り上げることができなかったものは数え切れません。そうした事項については、読者各位において巻末に掲げた主要参考文献等を参照いただきたいと思います。

### 主要参考文献

- 名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史一・二（名古屋大学、一九九五年）
- 旧制高等学校資料保存会編『資料集成 旧制高等学校全書』（昭和出版、一九八五年）
- 秦郁彦『旧制高校物語』（文春新書、二〇〇三年）
- 木村忠二郎編『瑞寮史』（第八高等学校寮文芸部、一九二六年）
- 大島先生記念会『大島義脩先生伝』（同記念会、一九三九年）
- 松木亮編『第八高等学校寮史』（第八高等学校寮、一九三四年）
- 八高創立五十年記念事業実行委員会編『八高五十年誌』（同実行委員会、一九五八年）
- 作道好男・江藤武人編『伊吹おろしの雪消えて』（財界評論新社、一九七三年）
- 八高創立八十年祭実行委員会編『わが友 若き旅人よ』（同実行委員会、一九八八年）
- 角田美弘『八高追憶―旧制高校生活回想―』（私家版、二〇〇三年）

著者略歴

山口 拓史（やまぐち たくじ）

一九六二年 兵庫県生まれ

一九九四年 名古屋大学大学院教育学

研究科博士課程（後期課程）単位取得

退学

現在 名古屋大学文書資料室助手

専攻 高等教育史

名大史ブックレット12

第八高等学校

——新制名古屋大学の包括学校①——

二〇〇七年三月三〇日 第一刷発行

著者 山口 拓史

編集発行 名古屋大学文書資料室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

電話 〇五二（七八九）二〇四六

印刷所 株式会社クイックス

〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町一九二〇  
電話 〇五二（八七一）九一九〇

# 名大史ブックレット

シリーズ 既刊本

- 
- ① これまでの大学院・これからの大学院  
山口 拓史 2000年12月刊
- 
- ② 名古屋大学 キャンパスの歴史1 (学部編)  
神谷 智 2001年2月刊
- 
- ③ 名古屋大学 スポーツの歩み  
高橋 義雄 2001年3月刊
- 
- ④ 豊田講堂と古川図書館—名古屋大学の寄付建物—  
堀田典裕・木方十根 2001年12月刊
- 
- ⑤ 名古屋大学最初の外国人教師—ヨングハンス先生とローレツ先生—  
加藤 鉦治 2002年3月刊
- 
- ⑥ 草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治  
神谷 智 2003年3月刊
- 
- ⑦ 名大祭—四〇年のあゆみ—  
山口 拓史 2003年3月刊
- 
- ⑧ 岡崎高等師範学校—新制名古屋大学の包括学校③—  
山口 拓史 2004年3月刊
- 
- ⑨ 豊田講堂—*Toyoda Auditorium*—  
山口 拓史 2004年9月刊
- 
- ⑩ 名古屋高等商業学校—新制名古屋大学の包括学校②—  
堀田慎一郎 2005年3月刊
- 
- ⑪ 農学部の誕生と安城キャンパス—学部の誕生と草創期①—  
堀田慎一郎 2006年3月刊
-



表紙写真 : 八高正門 (現在の明治村正門)  
裏表紙写真 : 八高正門の門標部分